

# W妹 ダブイモ ヴィジョナリー

DABUIMO VISIONARY

紙の体験版



二ノ宮 亜里紗  
(にのみや ありさ)  
編





# W妹<sup>だぶも</sup> ヴァイジョナリー

DABUIMO VISIONARY

紙の体験版



二ノ宮 亜里紗  
(にのみや ありさ)  
編

☆素っ気無くツンデレ(?)なリアル妹☆

に の み や あ り さ

# 二ノ宮 亜里紗

- 身長：155cm
- スリーサイズ：B79(A) / W59 / H82

主人公のリアル妹。  
主人公のことを「お兄い」と呼ぶ。

実の兄である主人公に対して並々ならぬ  
感情を抱いており、その気持ちを隠す為に  
普段は素っ気無く振舞っている。

いつか兄とHする日を夢見てアナルを  
開発し、主人公を想って毎晩アナニーに  
励んでいる。  
(アナルセックスなら血が繋がってても  
大丈夫と思った)

しかしある日突然、  
PCから飛び出してきたありすと融合してしまう。

ただし亜里紗にはありすと融合してるという  
自覚はなく、ありすにチェンジしてる間の記憶もない。

その為主人公はありすの存在を隠しつつ、亜里紗と  
接していくことになるが…

背は平均くらいの高さだが、胸は小さめでスレンダー体型。





『W妹ヴィジヨナリー』紙の体験版 二ノ宮 亜里紗 編

『妹』——それは男たちの永遠の憧れ。



ちなみに辞書で引くと、以下のような説明がされる。

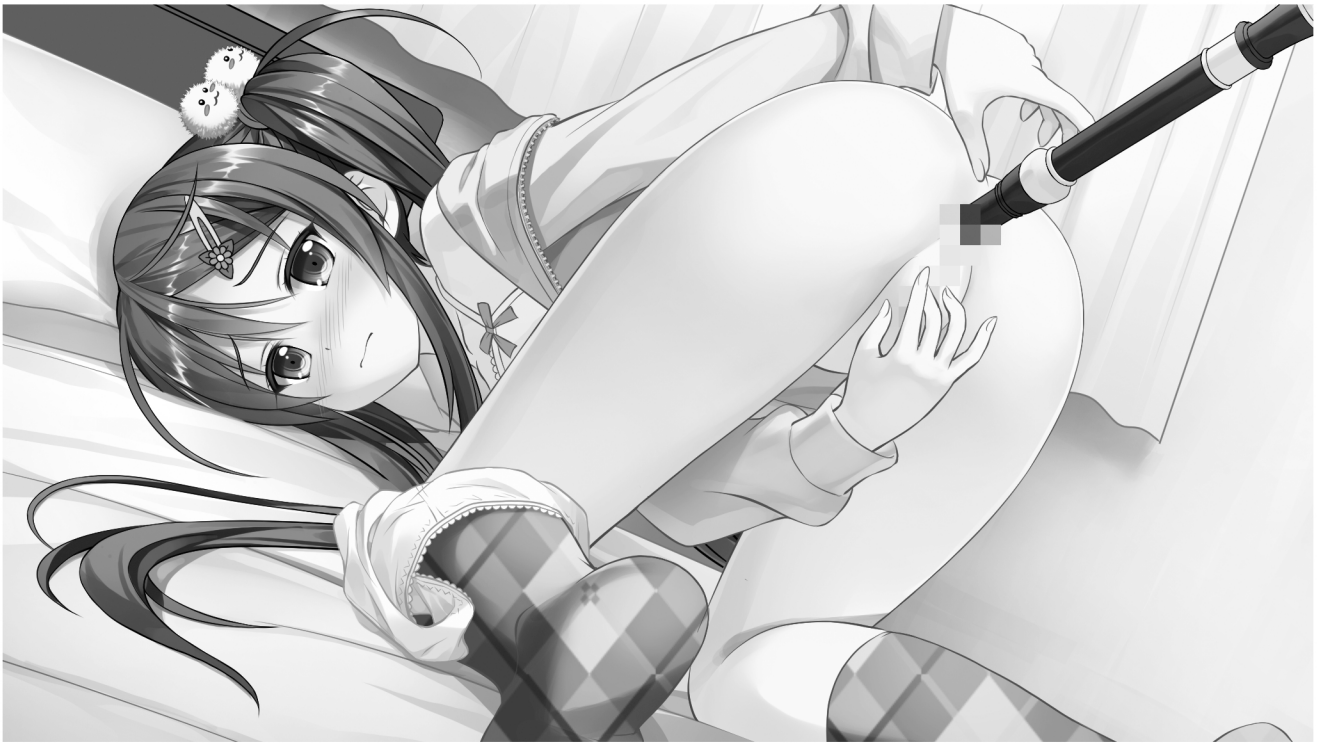
1 きょうだいのうちの年下の女。↓姉。

2 ≪「義妹」とも書く≫ 夫や妻の妹。また、弟の妻。義妹（ぎまい）。

しかし『妹』という言葉は古代の日本語に置いて、男が女を親しんでいう語。主として妻・恋人をさす。

という意味もあつたのだとか。

そう、つまり『妹』とは、男にとって女性に対する最大の愛情を注ぐべき存在なのだ――





「んんっ——はあはあ、はうううんんっ♥」

だからこの光景を前にしても、決して取り乱してはいけないのだ…

あばばばばばばばば。

自分にそう言い聞かせてみても、やはり目の前の光景は俺の理解の範疇を超えていた。

「イイツ、イイのお♥ お尻の中でえ、ゴリゴリついていつてるう！」

ただ今絶賛尻の穴にアルトリコーダーを突っ込んだるのは、俺の実の妹——二宮 亜里紗(にのみや ありさ)だった。

「ハアハア、フウフウ…お兄い、お兄い……っ♥」

妹はアナルに突っ込んだアルトリコーダーを出し入れしながら、『お兄い』と…俺のことを呼んでいる。

すさまじいよがり具合だった。

AVでもここまでの名演技はなかなかお目にかかれない。  
ただ惜しむらくは、これが恐らく演技ではないことだろうか――

「ふああんっ、お兄いのおち○ぽ気持ちイイ♥ もつと亜里紗のお尻を犯してえ！」

自らリコーダーを抜き差ししながら、勝手に俺をレイプ魔に仕立て上げる妹。  
どうやら妹の中では、あのリコーダーは俺のペニスに相当するらしい。

しかし俺のムスコは、そんなドレミを奏するような形状をしていなかった。

（つーかあのリコーダー、よく見たら俺のじゃねーか！）

あれは俺が中学の時に使っていたアルトリコーダーだ。  
ソプラノリコーダーより一回りはぶっ太いのが特徴の。

中学卒業以来どこにやったのかと思っていたら、まさか妹のアナルに入っているとは思わなかった……

「おっオッ、おほおおおっ！ お、おひり灼けそうにいい♥ なんか色々出ちゃうっつ」



なんか色々って何だよ！

何が出るかしらんが出したらまずいだろ、多分…

（ダメだ、やっぱ冷静で居られるかー！）

俺はドアの隙間からその様子を覗きながら、心の中で力いっぱい叫んだ。  
そもそも、こんなことはあり得ない筈なのだ。

妹が兄のアルトリコーダーでアナニーしてること自体、客観的に見ても常軌を逸した光景なのだが…

それ以前に、俺は妹から嫌われていると思っていた。

だから妹が俺をオカズにオナニーしてるなんて、夢にも思わなかったのだ。

（嗚呼、なんでまたこんなことに——）

昨日まで…いや、今日の夕飯時までは、ちょっと仲が悪いだけの、普通の兄妹だったのに。

そう思いながら、俺はその夕飯時のことを思い返していた。  
あるいはただの現実逃避だったのかもしれないが…

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「おつ、また面白そうなまとめスレが上がってるな。どれどれ…」

夜。夕飯前の微妙な空き時間を、俺はネットサーフィンして楽しんでいた。  
むしろ単なる暇つぶしのつもりが、時間が経つのを忘れてしまうのが困る。  
これも文明の利器の弊害って奴かねえ――

――ガチャ！

「ちよつと、お兄い」

「うおつ？ な、なんだ亜里紗か」

そこへノックもなしに部屋へ入ってきたのは、我が家の妹様だった。

「ノックくらいしてくれよ。ビックリするだろ？」

「だって一階からずっと呼んでたのに、返事がなかったから」

俺が常識に則ってそう指摘すると、素っ気無くそう返してくる亜里紗。

呼んでたのに気付かなかったのは俺が悪いが、かといってプライバシーを侵害されるのは心外である。（ダジャレではない）

「それは悪かったけどさ、それとノックしないのは別問題だろ？」

「なに、見られて困るようなことしてたの？ キモっ」

「は、はあ？ そんなことしてねーし！ 『歯医者になったら誰のCD頭に付けたい？』ってスレ見てただけだし！」

「…何それ？」

呆れられてしまった。どうやら妹には、このスレタイの秀逸さが伝わらなかったらしい。

これじゃ俺がギャグを外しちまったみたいなおサムい空気になっちゃうだろーが！

「いや、違うんだ。コレはな？ 歯医者が頭につけてるアレあるだろ？

あれがCDみたいだっていうところから――」

「そんなことより、夕飯できたから」

「……………」

俺が懸命このスレタイの面白さを説明しようとするのを遮って、亜里紗は素っ気無く用件を告げる。

一階から呼んだというのはそのことだったのか……

そういや、そもそも俺は夕飯待ちだったつけ。

仕事の都合で親が家を空けることの多い我が二ノ宮家では、家事は炊事洗濯が妹、洗い物や掃除その他雑用が俺という分担になっている。

洗濯はともかく炊事は育ち盛りの身としては生命線なので、妹には強く逆らえない俺であった。

「ご飯冷めるし、早く降りてきてよね。ワケわかんないこと言っただけで」

最後まで無愛想を貫き通して、妹はさっさと部屋を出て行った。

「はあ…なんだかなあ」

俺はやるせなさにため息をつきながら、少し間をおいて妹の後を追った。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「おつ、いい匂いが…今日はさんまか」

一階のリビングに入って、食卓に着く。

そこには食欲をそそる旨そうな夕飯が並んでいた。

実に愛想のない我が妹だけど、料理の腕は確かなのがまた心憎い。

「早く座ってよ。お腹空いちやったじゃない」

「ああ、そうだな」

せつついてくる妹にはこの際逆らわず、言われるがまま席に着く。

「じゃ——いただきます」

「いただきます」

律儀に俺が席に着くのを待ってから、手を合わせて食べ始める亜里紗。

俺に対する態度は何かとアレだけど、こういう躰けの良さは兄の目から見ても好感が持てる。  
(母さんの教育の賜物だろう)

だからどんなに邪険にされても、俺は妹のことを嫌いにはなれないんだよなあ……  
などと密かに思いながら、俺も妹に続いて夕飯に箸をつけた。

「ズズズズッ——うん、やっぱり味噌汁は白味噌だよな」

まずはじゃがいもとたまねぎの味噌汁をすすり、我が家の味を堪能する俺。

ちなみに今夜のメニューはご飯に味噌汁、さんまの塩焼きに自家製ポテトサラダと、派手ではないが堅実なメニューだった。

「それじゃ、次はさんまをおかずにご飯を…うん、旨い！」

醤油をかけた大根おろしをさんまの切り身に一口分のせ、ご飯と一緒に食べる。

さんまの旨みと大根おろし、そして醤油のハーモニーが口の中に広がって、ご飯が進む進む！

「ハムハム、ハフハフ、ムシヤムシヤムシヤ！」

「……………」

「…ん？」

そうやってしばらく無言で食べ続けていると、妹がこちらをじっと睨んでいるのに気付いた。  
なんだろう、無言のプレッシャーを感じる…

「ど、どうした？ そんな穴があくほどこっち見て」

「は？ 穴なんてどこにもあいてないし」

「いや、だからそういう意味じゃなくてさ」

相変わらずものの例えというか、こちらの言い回しが通じない妹である。

こんなんで国語の成績は大丈夫かと、兄としては非常に心配だった。

「それよりさ…普通、感想とか言うもんじゃないの？」

「感想？ あ、ああ、そういうことか」

そして妹と違って察しのいい兄である。亜里紗の言いたいことをすぐに理解した。

「うん、美味しいよ、いつもながら」

「…いつもそればっか。ボキャブラリーないし」

「お前に語彙について言われたくないよ！」

そう言われても、美味しいものは美味しいとしか言い様がなかった。

実際妹の料理の腕は大したもので、そのおかげでこうして毎日美味しい飯にありつけているのだ。

俺はほとんど料理をしないので、その点は本当に感謝している。

でも改めてそれを口にするのも、なんだか気恥ずかしかった。



「お兄いはそんなだから彼女ができないんだよ」

「それ関係なくない!?　っーかほっとけよっ」

「ま、彼女ができててもすぐに別れさすけど」

「性質の悪い姑か、お前は！」

「何言ってるの?　その彼女を思ってることだよ?」

「兄を思ってることですらなかった！」

「だってこんなシスコンお兄いだよ?　彼女が可哀相じゃない」

「誰がシスコンだ、誰が！」

まあこんだけボロクソ言われても妹が嫌いじゃない俺は、シスコンと言われても仕方ないかもしれない。

「せめて私を喜ばせることくらいは言ってよね。でなきゃ女にモテないから」

「ああもう、悪かったよ…」

「……………」

「……………」

結局俺の感想に妹はご不満のようで、気まずい空気が食卓に流れる。

そこで兄として気の利くところを見せようと、俺は話の切り口を変える。

「そうだ。毎日飯を作ってもらって悪いから、洗い物や掃除だけでなく、洗濯も俺がやろうか？」

そう提案してみる俺。家事を分担するとはいえ、毎日飯を作るだけでも大変だろうからな。しかしそんな俺の気遣いに対し、妹は冷たいジト目をもって応えた。

「お兄い、私の下着を洗うつもりなの？ …変態」

「ち、違う！ そんなつもりじゃないってっ」

「お兄いは妹の下着をクンカクンカしようとする変態… 亜里紗、覚えた」

「だから違うと言ってるだろうが！」

しかもなんだその口調。なんで若干カタコト？

どこまで本気かわからない妹の態度に、俺は大いに不名誉を感じていた。

「つーか、妹の下着なんかで欲情するかよ！」

「は？ なにそれ、私の下着になんか文句あるの？」

「そうじゃなくて！ 俺が言いたいのは倫理的なコトだよっ」

むしろ妹の下着はモロ俺の好みだった。

しまパンとかしまパンとか、あとしまパンとか。

しかしそれを見てほっこりと和むのと、ハアハア息を荒げるのには大きな違いがあるわけで。

「妹を…家族をそういう目で見てるわけないだろうって話だ。 それこそキモいじゃないか」

「っ……！」

「…？ どうした、亜里紗」

「……………」

俺が言うまでもない常識をあえて口にする、と、亜里紗は何故か口ごもってしまった。

また何か機嫌を損ねてしまったのだろうか？

でも今の発言にそんな要素なんて何一つ――

「——とにかく、洗濯も今まで通り私がやるから」

「そ、そうか。まあお前がそう言うなら…」

「お兄いに自分の下着を洗われるなんて、想像しただけでゾツとするし」

「……………」

ムスツとしたまま妹にそう言われ、俺はなんだか凹んでしまった。

（子供の頃は『お兄ちゃん大好きー』とか言ってたのに、一体どうしてこうなってしまったのか…）

こんな風に妹からすっかり嫌われてる感じだが、これも年頃の娘だからしょうがないのかもしれない。

とはいえ俺自身は妹を嫌ってないし、むしろ俺なりに愛してさえいる。

それに文句言いながらも毎日美味しい飯を作ってくれるので、妹に嫌われてるという事実が正直辛かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ふう…魚料理の時は脂分が少ないから、洗うのも楽だな」

夕食後、風呂を沸かしてる間に洗い物をする俺。

前述の通り、家事の中で洗い物は俺の仕事だった。

正直めんどくさいと思わないでもないが、毎日あんな美味しい飯を食わせてもらってる以上、俺がサボるわけにもいかない。

「…TV、面白いのやってないなあ」

妹はリビングのソファに座ってテレビを見ているが、退屈そうに何度もチャンネルを変えている。

（だったら自分の部屋に戻ればいいのに…）

夕食後に風呂が沸くまでTVを見るのは、妹の習慣の一つである。

そして妹のTVに対する愚痴やらツツコミを聞きながら、俺が洗い物をするのもまた習慣だっ

た。

ま、一人で洗い物をしてるのも虚しいから、こんな妹でもないよりマシというものだろう。

「——つくちゅん！」

その時、妹がヤケに可愛いクシヤミを一発かました。

「どうした、風邪か？」

「…スケベ」

「なんでだよ!？」

純粹に妹の身を案じただけなのに、なんたる理不尽か。

俺、泣いていいよね？

「最近、ちょっと鼻がムズムズするだけ。別に風邪とかじゃないし」  
「そうか…だったら花粉症かもな。あれも突然なるっていうし」

昔クラスメートにひどい花粉症の男子がいて、常に箱ティッシュを机の上に持参してたの思  
い出す。

「まあ風邪じゃないならいいけど、ひどいようなら病院に行った方がいいぞ？」

「なに：私のこと、心配なの？」

「当たり前だろ、家族なんだから」

「：このシスコン」

「だーかーらー、そんなんじゃないっての！」

「ふふっ、なにムキになってんの？」

例によつて生意気な口ぶりだったが、何故か機嫌は良さそうだった。

全く、情緒不安定な妹の扱いは大変だぜ：

で、一通り洗い物が終わったところで、ちょうど風呂が沸いたことを報せる電子音が響いた。  
実にいいタイミングだが、ここはご機嫌を取るつもりで、あえて妹に先を譲るか。

「亜里紗、風呂沸いたから先に入れよ」

「んー：今、TV見てるから」



しかし妹は生返事でそう答える。

そんな熱心に見てるようには見えなかったけど…？

「それとも先に私にお風呂に入らせて、残り湯で変なことでもするつもり？」

「そんな発想は微塵もなかったよ！」

「なんでよ！ お兄いの大好きな妹が入った残り湯なんだよ？」

「だから俺は、そんな目でお前を見てないっつーの！」

なにこの妹、そんなに俺を変態にしたいの？

わけがわからないよ。

「…ふーん、そっか。 お兄いは私のことが好きじゃないんだ」

「なんでそうなるんだよ…そんなわけないだろ？」

「じゃあ、好き？」

「それは…」

もちろん、好きだ。好きに決まってる。

だって亜里紗は妹なんだから。

でもそれを口にするのはやっぱり抵抗があつて、俺は適当に誤魔化すことにした。

「わかったよ。じゃあ風呂は俺が先に入るからな」

「あつ…お兄いの、バカ」

リビングを出る時に妹が何か言った気がしたけど、よく聞き取れなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ふいふ、いい湯だった」

風呂から上がって再びリビングに舞い戻った俺。

見ると妹はまだリビングにいて、ぼんやりTVを眺めていた。

「亜里紗ー、風呂上がったぞ」

「んー…わかった」

俺が声をかけると、亜里紗は生返事をしながら立ち上がる。  
今度は愚図らず素直に風呂に入るつものようだ。

「お風呂、覗かないでよね」

「覗くか！」

「…覗かないんだ」

「覗かないよ!？」

なんでそこで不満そうなんだ。  
むしろ覗いて欲しいのかよ。

「ちなみに私、どこから体を洗い始めると思う？」

「ん？ 左足からだろ」

「…やっぱり覗いてるんじゃない」

「違う！ お前は昔からそうだっただろっ。一緒に風呂入ってた時から！」

そう、俺達にも仲良く一緒に風呂に入ってた頃があったのだ。

それが今じゃ、風呂を覗く覗かないで揉める関係だけ……

「ま、いいわ。それじゃお風呂入るから」

「ああ。風呂から上がったら、お湯は抜いておいてくれ」

「……妹の残り湯、捨てていいの？」

「やけに勧めてくるね、妹の残り湯!？」

何がそんなにオススメなのか。

それとも自分のダシに自信があるのか？

「……フンッ。お兄いのバーカ」

最後には謂れのない罵倒を残し、亜里紗は風呂場へと向かった。

「なんなんだよ、全くもう……」

そんな妹の背中を見送りつつ、台所で水分補給をした後、俺は自分の部屋へと戻った。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「はあ…本当に、どうしてこうなっちゃったかなあ」

ベッドの上に横たわって休みながら、妹のことを考える俺。

昔の亜里紗はお兄ちゃんっ子で、何をするにも後ろを付いてきてたのに…  
今じゃすっかり邪険にされてるといふか、正直どう接すればいいのかよくわからなかった。

（まあそれでも、朝と晩の飯はちゃんと作ってくれるけどさ…）

けどそれも嫌々やってるのかと思うと、悲しくなってくる。

ちなみに昼飯は学校の購買でパンを買ってる。

これは妹の負担を減らす為に、俺の方から申し出た。

「昔みたいに仲の良い兄妹に戻りたいなあ………ぐう」



「ん？ 亜里紗の部屋から明かりが――」

部屋から二階の廊下へ出ると、真っ暗闇の中で一筋の光が差していることに気付く。光源は、妹の部屋のドアの隙間だった。

「亜里紗の奴、まだ起きてるのか？」

さつき時計を見た限りじゃ、とつくに寝てる筈の時間なんだけど…

「……………んっ……………ふぁ、ぁぁんっ……………」

「…んんっ？」

今度は光の差す方から、今まで聞いた事のない、妹の甘い声が響いてきた。  
なんだ、今のは？ 空耳？ それとも幻聴？

でも、確かに聞こえた。あの声は妹のものに間違いない――

「――んふっ、はぁはぁ、フウフウ…んんっ、はぁん♡」



ほら、やっぱり！　なんかイケナイ感じの声音が、ばっちり聞こえてきてるってっ。

「これって、まさか…？」

俺はまるで暗闇の中の虫のように、ドアの隙間から漏れる光に吸い寄せられていった。で、そのドアの隙間から部屋の中をこっそり覗くと…

そこには予想通りの、いや、予想以上の光景が広がっていた。

「おほおっ、おおおおん！　お、お尻い、おひり気持ちいいっ♥」

「!？」

そこにはぶつといアルトリコーダーをケツの穴に突っ込んで、よがり狂っている実妹の姿があった。

「お兄い、お兄い♥　お兄いのち○ぽっ、ぶつといよお！」

しかも、どうやらあのアルトリコーダーを、俺のペニスに見立ててるようだ。俺のことを呼びながら、リコーダーでアナルをかき回す妹：

「つくう、んんンンン！ おお、お尻の穴ア、もうたまんナイのお♥」

あまりの光景に我が目を疑う俺。

しかし何度目を瞬かせてみても、妹が俺をオカズにオナニーしてる事実には変わりはなかった――

――以上が、ここに至るまでの経緯である。

そしてその信じられない光景は、今もなお目の前で繰り広げられていた。

「お兄いゝっ、お兄いいいいイイ♥ もつとズボズポしてえ、お尻壊れちゃうくらいにいい！」

妹は未だ俺が見ていることに気付かず、アルトリコーダーを容赦なくアナルに抜き差ししている。

その肛門はもう痛々しいくらいに捲れ上がって、それでも亜里紗は快感によりがりまくっていた。

（よりによって、なんで俺をおかずに？ そのアルトリコーダーはいつの間にパクった？ し  
かもアナニーかよ！）

などと、さまざまな思考が浮かんでは消えて、俺はかなりの混乱状態に陥った。  
てつきり俺は妹に嫌われてると思ってたのに、まさかこんな光景に出くわすとは…

（…くう！ バカ、なにおっ立ててんだ俺はっ）

そしてそれを見ながら、自分が勃起するのを感じる。

妹のオナニーを覗き見して勃起するなんて、俺は兄失格だ…！

（…けど、その妹も兄をオカズにしてるんだから、これっておあいこなんじゃ？）

などと俺が謎の葛藤を繰り広げている間にも、妹のオナニーはいよいよ激しさを増していく。

「お兄い、イクよ♥ 亜里紗あ、お尻でイッちゃうう！」

（うおおつ、ま、マジでか!？）

ズポズポとここまで音が響くくらいに、リコーダーをアナルに抜き差しする亜里紗。ついに迎えるクライマックスの様子に、俺も思わず見入ってしまった：

ガンッ!!

「いつてえ!？」

しかしその時、あまりに見入りすぎてドアに顔が当たってしまった。

ギーー…

「ふえっ？」

「あっ——」

最初から少し開いていたドアは、俺が頭をぶつけた反動で大きく開き…そしてそれに気付いた妹と、ドアの隙間から覗いていた俺の目が合った。

「あ…ああ…？」

「……………」

一瞬で空気が凍りつき、妹の動きが止まる。俺も硬直して動けない。

「…み、見てたの？」

「…う、うん…」

この状況で下手なウソをつくこともできず、正直に答える俺。

妹も最初は思考停止していたが、徐々に状況を把握し、自分が兄にオナニーを目撃されたことを理解したようだ。

「ウソ…こんなところ、お兄いに見られて… お兄いをオカズにして、お尻イジッてるところ…！」

「あ、あのな…亜里紗？」

「やあ…！ み、見ないでっ。　　こんな、こんなあ——いいッ、はひい！！」

「お、おい、ちよつと——」

「やらあ、やなのにい…！　イク、もうイツちやうつ、いいイイ…♡」

「あ——っ♡　アッあああああ~~~~♡♡♡　おお、ああおおおおおっ♡」

アナルにリコーダーを突き刺したまま、盛大に潮を吹いてイク妹。

どうやら亜里紗は俺にオナニーを見られたショックよりも、見られたことによる興奮の方が勝ったようだ。

「わ、わたしひイッてる！ お兄いに見られながらあ、わらひイッちやつてるのおっ♥」  
「あ、亜里紗…」

一方俺はショックのあまりその場から一步も動けずに、妹がイク姿を最後まで見届ける羽目になった。

「イひっ、ヒイヒイ、らめえ、止まんないよお！」

「……………」

「だからあ、こっち見ないでってえ…！ あひい、いいいい〜〜〜っ」

俺だって見たくなかった。でも見ないわけにはいかなかった。

最愛の妹が、俺をオカズにアナニーして…

おまけに俺に見られたことに気付きながら、イキまくってるんだぞ？  
こんなのもう、目が離せるわけがなかったんだ――

「ハアハア、フウフウ、んっんんっ………あうう」

「……………」

「はふう……………んっ、はあ…はああ…」

「……………」

「……………」

しばらく絶頂の余韻に浸っていた様子の妹だが、やがて息が落ち着くと共に、その目に理性が戻ってきた。

これは、あれか。男で言うところの賢者タイムって奴――

「…出て行って」

「へ？」

「出てってよ…」

力なくそう告げられ、俺もようやく我に返った。



これ以上ここにいてどうしようってんだ？

妹がアナルからリコーダーを抜くまで見届けろと？

あるいはこの場でリコーダーを返してもらおうという選択肢は…ないな。あるわけがなかった。

「ご、ごめん！」

慌ててそれだけ言うと、俺は逃げるようにその場を後にして自分の部屋へ戻った。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「はあ…と、とんでもないものを見てしまった…」

部屋に戻った俺は、いまだ混乱の最中にあつた。

妹が俺のリコーダーをアナルにぶっこんで、俺をオカズにオナニーしてたなんて…

ダメだ、あまりに現実感がなさ過ぎて、さっき見た光景が夢なんじゃないかと思えてくる。

「そうだ、あれはきつと夢なんだ。だからさっさと寝て、忘れてしまおう」

自分でも矛盾してると思うセリフを呟きながら、のそのそとベッドに潜り込む俺。  
そしてそのまま、本物の夢の中へ…

「……………くそっ、眠れねえ…」

しかしもちろん、アレを見た直後ですんなり眠れる筈がなかった。

我が愚息もギンギンに勃起したままだし、かといって流石に今から又く気にもなれない。  
つか瞼を閉じると、アナニーに励む妹の図が脳裏に浮かび上がってくるようで――

「忘れよう、忘れるんだ、俺…！」

俺は悶々とした気持ちを抱えたまま、布団を頭から被って邪念を振り払おうと努めた…

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「……………もう、朝か…」

それから数時間後の、翌朝。俺は結局ろくに眠れずに朝を迎えた。

多少うつらうつらして意識が飛んでた時もあったけど、ほとんど一睡もしてない。そうこうしてるうちに、一階から料理している気配がする。

どうやら妹も起きて、今は朝飯の準備をしているようだ。

（昨夜あんなことがあったのに、大したメンタルだな…）

俺だったら顔を合わせないうちに、黙って先に学校へ行くとところだぞ。ちなみに俺と妹は現在、同じ学校に通ってる。

俺が三年で、妹は今年入学してきたばかりの一年だった。

ピ。ピ。ピッ、ピ。ピ。ピッ…

「うおお!? な、なんだ目覚ましか…」

不意に目覚まし時計が鳴ってビビる俺。

毎朝同じ時間に鳴るようセットしてたのを忘れた。

「つーか、もう起きる時間か…どうしよう」

普段ならこのまま下に降りて朝飯を食うところだけど…

顔を合わせるのは気まずいし、でも避けるとかえって意識してるような感じになるし――

「とにかく、このまま部屋に籠ってるわけにもいかないよな」

最悪、部屋まで起こしに来る可能性がないとも言えない。

実際俺は寝起きが悪くて、布団の中でグズグズしてる時は、文句言いながらも妹が起こしにきてくれるからな…

「…よし！ 亜里紗が避けてこない以上、俺もなるべくいつも通りに振舞おうっ」

亜里紗だって気まずいだろうし、俺の方が気にしてたら余計にギスギスしてしまうだろう。うん、それが兄の心意気ってモンである。

俺は覚悟を決めると、制服に着替えて一階のリビングへ向かうことにした。

「おはよ」

「っ？ お、おう。おはよ…」

一階のリビングに入ると、そこには制服姿の妹がいた。

普段と変わらぬの素っ気無い朝の挨拶に、俺は気後れしながらもとっさに返事をする。

俺以上に、妹の方がいつも通りだった：

これじゃ意気込んだ俺がバカみたいじゃないか。

「早く座つてよ。朝はあんまり時間ないんだし」

「そ、そうだな」

テーブルには妹が用意してくれた朝ご飯が並んでおり、どこまでもいつも通りの朝の光景だった。

「いただきます」

「いただきます…」

そして俺が席につくと、妹は手を合わせてから食べ始める。  
俺も自然とそれに倣った。

「……………」

「……………」

しばらくの間、無言で朝食を食べ続ける俺達。  
茶碗や箸が鳴る音だけが静かに響き渡る。

今日の朝食はご飯と味噌汁、そして目玉焼きとウインナー。  
やはり派手さはないが堅実なメニューだった。

「お兄い、その醤油取って」

「お、おう。ほら」

「ん、あんがと」

そして肝心の妹も、やっぱり普段通りに見える。

しかし昨夜はあんなシーンを俺に見られたのだ。  
内心は平静である筈がない！

そんなことを考えながら、チラチラと妹の様子を窺っていると…

「…さっきからなにこつち見てるの？ キモいんですけど」

「……………」

キモいのは兄をオカズにして、兄のアルトリコーダーを尻に突っ込んでるお前の方だー！

——とか内心で思うが、まさか口に出すわけにもいかず、黙り込んでしまう俺。

しかし言われっぱなしもシヤクだし、そつちがその気ならこつちだって踏み込んでやる…！

「あのさ」

「なによ」

「アルトリコーダー…」

「！」

俺がその単語を口にすると、流石にピクッと反応する亜里紗。その反応に勝機を見出した俺は、更に踏み込んでみることにした。

「俺のアルトリコーダー、なくしたと思ってたんだけど…」

「……………」

「その、お前が持ってたんだな」

言い方には気を遣っているものの、俺的には最大限の攻撃のつもりだった。どうだ、この件を持ち出されてはぐうの音も出まい…！

「…なによ、もうリコーダーなんて使わないでしょ!？」

「え、ええ…?」

すると妹はこちらをキッと睨んで、あろうことか逆ギレ気味に反論してきやがった！

確かに今通ってる学校だと音楽は選択授業で、俺は音楽を選択してないが、そういう問題じゃないだろ!?



「お兄いがもう使わないなら、私が有効活用してもいいじゃないっ」  
「ゆ、有効活用て！」

あかん、この妹完全に開き直つとる。

この展開は予想外だった。

まーなんだかんだで妹も話に乗ってきたので、この際もう少し昨夜のことを尋ねてみるか…？

「お前ってさ、いつからアナニーに目覚めたの？」

「！　へ、変態…」

「いや、変態はお前の方だろ！」

顔を赤くして人を変態呼ばわりする妹に、俺は思わず言い返した。

「ケツの穴にアルトリコーダー突っ込んでた、お前にだけは言われたくないぞ！」

「ち、違うっ。アレは別に、そういうのじゃないし！」

「じゃーどういうのなんだよ？　この兄にもわかるように説明してくれ」

「だ、だからそれは…その、純潔を守る為よ…」

「は？ 純潔って…？」

「だからあ、前の方はその、好きな人とする為にとっておきたいでしょ？」

「それで仕方なく、後ろの方を使っただけなのよ……」

「いや、そのりくつはおかしい」

の○太に説教するドラ○もんみたいなセリフを口にする俺。

オナニーのやり過ぎで処女喪失したくないのはわかるが、だからってアナルを開発することないだろ!?

「つかさ、よりによつて俺のアルトリコーダーを使わなくても……」

「…お、大きさがちょうど良かっただけだし…」

「いや、アレはむしろ太すぎるだろ！　せめて太さ的にソプラノリコーダーにしろよっ」

「はあ？ ソプラノリコーダーなんて、もうとつくに卒業しちゃってるし！」

「え、なにソレどういうこと!？」

「私だって最初はソプラノリコーダーを使ってたの！でも段々慣れてきて、太さ的に物足りなくなったから…」

「え、ええゝゝゝつ…?」

妹の更なるカミングアウトに絶句する俺。

まさか、ソプラノは既に卒業済みだったとは…一体どんだけ前からアナル開発してたんだ、この妹は？

「あのさ、念の為聞くけど… まさかそのソプラノリコーダーも、俺のじゃないよな？」  
「何言ってるの、お兄いのに決まってるじゃん」

「な　　　　　で　　　　　だよ！」

もうやだこの妹、開き直りすぎい…！

「だ、だってお尻の穴に入れるなんて汚いじゃん！ だから、もう使っていないお兄いのならいいと思って…」

「いいわけあるかー！」

なんで俺のならいいと思っちゃったの？

俺のリコーダーに人権はないのか？ いやないけどさ。

「もういい、ご馳走様！」

亜里紗は俺の尋問に耐えかねたように、朝飯を半分以上残したまま席を立った。

「私、先に学校へ行くからっ」

「おい、飯まだ残ってるぞ！」

「いらないっ。もったいないからお兄いが食べてよ！」

一方的にそう告げると、亜里紗は鞆を持ってリビングを飛び出していった。

妹の希望により、俺達はいつも別々に家を出るけど、普段なら登校するにはまだ早すぎる時刻だ。

自分で作った飯もろくに食ってないし、これ以上俺と顔を合わせたくないという意味表示だろう。

「…うちの妹が、こんな変態だったなんて…」

俺の方もショックで愕然として、とても平静ではいらなかった。

まさかここまで色々こじらせてるとは思わなかったぞ…

いや、昨夜のアレを見た時点で気付くべきだったか。

「いやマジで、これからあいつにどう接していけばいいんだ…？」

途方に暮れながら、亜里紗の座っていた席に目を向ける。

そこには妹が食べ残した朝食が、ぽつんと置かれていた。

「あーあ、こんなに残して… 亜里紗の奴、これで昼休みまで持つのか？」

言いながら、半分ほど齧られたウインナーを箸で摘む。

洗い物は俺の担当だから、食べ残したものを処理するのも役目だった。

なので仕方なく、妹の食べかけを処理していく俺。

「パリパリ、ムシヤムシヤ、ズズズズ…」

ウインナー、目玉焼き、味噌汁：

みんな妹が中途半端に手をつけたものばかり。

家族なので食べかけを口にするのに別段抵抗はないが、今日ばかりは何だか妙な気分だった。

「…亜里紗の、唾液の味がする…」

いや、何となくそんな気がするだけ。

かといってそれが嫌なわけじゃなく、むしろ亜里紗の唾液を体内に取り込むことで、妹との奇妙な一体感が――

（――って、なに勃起しちやってんの俺えー!?!）

妹の残飯を食って勃起なんて、亜里紗に負けず劣らずの変態だろ！

（違う、俺はそんな変態じゃないんだー!）

慌てて自分にそう言い聞かせる俺。

妹のことはあくまで家族として好きなのであって、亜里紗みたいに性欲の対象になんてしてないっ。

「そう、違う…俺は違うんだ…パクパク、ムシヤムシヤ、ガツガツガツ！」

念仏のようにブツブツとそう唱えながら、妹の食いかけを含めて、全ての朝食を平らげる俺だった。

その後、洗い物を終えてから家を出て学校へと向かう。

「ふいー、ちよつと食いすぎたか…？ げっぷ」

満タンになった腹をさすりながらの登校中、脳裏を過ぎるのはやはり不肖の妹のことだった。昔は仲が良かったのに、いつ頃からか俺に対して、やけに素っ気無くなった妹…

てつきり嫌われてるのかと思ってたが、まさかオナニー（正確にはアナニー）のオカズにされてるとは、お釈迦様でもご存じなかったに違いない。

（これってつまり、どういうことなんだ？）

本当に嫌いなら、オナニーのオカズにされるとは思えないけど…

（いや、むしろ嫌いだからこそオカズにされたのか？

男が時に、ムカツク女をレイプする妄想をするのと同じように？  
しかし男と女じゃ、根本的な意味合いが随分違う気もする。

女性の基本される側だし、嫌いな男（しかも実の兄）に犯される妄想を、好き好んでするだろうか…？

…などと考えてるうちに、学校の前までやって来る。

いかん。妹も既に学校へ来てるだろうし、そろそろ頭を切り替えなくちやな。



**W妹ヴィジョナリー紙の体験版**  
**二ノ宮 亜里紗 編**

2015年1月28日発行

**著 作：コットンソフト**  
公式サイト：<http://cotton-soft.com/>

無断複写・複製・転載を禁じます。

# W妹 ダブイモ ビジョナリー

DABUIMO VISIONARY

2015年2月13日発売

ジャンル:二人の妹が二心同体ADV

原画:大泉だいさく / 麻の葉、シナリオ:海富一

## 動作環境

対応OS:Windows Vista / 7 / 8、必須CPU:Pentium 4 2GHz以上

推奨CPU:CoreDuo 2Ghz以上、DirectX:DirectX 9.0c以上、音源:Wave音源

【限定版】4,480円(税込)、【通常版】3,980円(税込)

※「限定版」には『おまけシナリオ』『設定資料集』『特典楽曲』が付いてきます。

詳しくは、

<http://gyutto.com/spgame20141204.html>